

【研究レポート】

保育者を目指す学生の評価尺度を用いた 保育評価に関する印象について

菅原航平

【要旨】

改訂（改定）された幼稚園教育要領・保育所保育指針などで「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が示され、幼稚園教諭・保育士養成課程においても10の姿の理解や10の姿を用いた評価などについて指導が行われている。一方、ECERSなどの評価尺度を用いた評価についても近年注目されているが、現職の保育者や保育者を目指す学生にとって、評価尺度はまだ馴染みが薄く理解度が高いとはいえない。そこで本報告では保育者養成校での評価尺度に関する授業についての学生の感想や質問紙調査の結果から、学生の評価尺度を用いた評価に関するイメージや理解度を整理して、今後の授業改善や現職者研修を行う際の基礎的な資料とすることを目的とした。結果、10の姿による評価とECERSなどの評価尺度による評価を比較すると、卒業後に評価尺度を用いた評価を行ってみたいという項目で低くなっており、有意な傾向がみられた。このことなどから、評価自体の重要性や評価尺度を用いた評価の長所などを学生時代から十分に伝えていくことの必要性などが考えられる。

1. はじめに

保育の評価については、改訂（改定）された幼稚園教育要領¹⁾・保育所保育指針などには、「指導の過程を振り返りながら幼児の理解を進め、幼児一人一人のよさや可能性などを把握し、指導の改善に生かすようにすること。その際、他の幼児との比較や一定の基準に対する達成度についての評定によって捉えるものではないことに留意すること。」「評価の妥当性や信頼性が高められるよう創意工夫を行い、組織的かつ計画的な取組を推進するとともに、次年度又は小学校等にその内容が適切に引き継がれるようにすること。」などの記載がある。また、改訂（改定）により「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10の姿）」が示され、幼稚園教諭・保育士養成課程においても10の姿の理解や10の姿を用いた評価などについて指導が行われている。

10の姿を用いた評価は、保育及び子どもに関する保育者の記述や語りにより評価を行うことが中心であったわが国では、保育者が行っていたこれまでの評価とも親和性の高い評価方法であるといえる。文部科学省が平成31年に刊行し

た「幼児理解に基づいた評価」²⁾において扱われている内容の中心も、記録と話し合いに基づいた評価についてである。

10の姿を用いた評価など記録と話し合いに基づく評価について、高辻（2016）³⁾は、保育・子どもに関する保育者の記述やナラティブにより行う方法であり、個別的に実際の保育の過程において、とくに子どもと周囲の物的・人的環境との関係性に焦点を当てながら様々な意味や価値を生成していくことに適したアプローチとして捉えることができると述べている。

一方、近年ECERS⁴⁾など、評価尺度を用いた評価についても注目されている。高辻（2016）³⁾は、あらかじめ項目を定め構造化されたチェックリストや評定尺度をもとに行う方法であり、系統的・網羅的に保育の全体的な成果や達成状況、不十分な点などの検証に適したアプローチだと述べている。しかし、評価尺度を用いた評価は、欧米では一般的な方法であるが、わが国ではまだ保育者にとって馴染みは薄く、理解度が高いとはいえない。

保育評価尺度で、代表的なものは、ECERS⁴⁾

であり、アメリカでテルマ・ハームス博士らにより1980年に開発された、3歳以上の集団保育の質を測定する尺度である。第3版は英語版が2015年に刊行され、2016年に埋橋らにより邦訳された。ECERSは、学術調査、自己評価、監査あるいは査察ツールとして信頼性が極めて高く、現在ヨーロッパ、アジア、南米20か国以上で使用されている。海外の研究では、この尺度得点と主体性、協調性の相関が認められており、国内の研究でも、発達検査の得点と相関が認められている⁵⁾。

ECERSは、個別的な物的環境あるいは保育者からの関わりに注目し、その内容を高めていくことで、子どもの経験を豊かにするというアプローチであり、集団保育の総合的な質を測定する⁴⁾。具体的には、3時間程度の保育観察により、6つのサブスケールに分類された35の項目につき、各項目に含まれる10前後の指標に基づいて7段階で評定を行い、指標となる質問ひとつひとつを「はい」または「いいえ」のいずれかに判定し、手続きに従って1点から7点までで評点を得ることで、保育評価や改善に活用する⁶⁾。

他、日本語で活用できる評価尺度としては、「新・保育環境評価スケール②【ITERS-3】」⁷⁾、「新・保育環境評価スケール③【ECERS-E】」⁸⁾、「保育のプロセスの質」評価スケール【SSTEW】⁹⁾、「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール【MOVERS】¹⁰⁾、「子どもの経験から振り返る保育プロセス【SICS】」¹¹⁾などがある。ただし、これら海外で作成された尺度を用いる場合は、その国のナショナルカリキュラムを基盤として開発されていることを忘れてはならず、使用する際には幼稚園教育要領や保育所保育指針を十分に参照しながら用いる必要がある。

ナショナルカリキュラムを基盤とした評価という課題があり、わが国では例えば、国立教育政策研究所幼児教育センターの研究指定校での研究では、「幼児期の豊かな言葉を育む指導と評価の在り方」¹²⁾というテーマで領域「言葉」の内容を視点にした評価表の作成・評価や「学びをつなぐ教育課程～幼児期にふさわしい評価の在り方を探る～」¹³⁾というテーマで「幼児期の

終わりまでに育ってほしい姿」を視点に評価指標を作成・活用するという研究などを行っている。さらに、プロジェクト研究「幼児期からの育ち・学びとプロセスの質に関する研究」【平成29～令和4年度】(研究代表者渡邊恵子)¹⁴⁾では、海外のスケール、幼稚園教育要領、10の姿等を参考に「幼児教育におけるプロセスの質評価スケール」について検討されている。その他、日本での調査をもとにして「園庭環境多様性指標」¹⁵⁾が開発されるなど、様々な機関で評価尺度の作成・活用が盛んに検討されており、保育現場でも実践に用いられることも増加している¹⁶⁾。

このことから、本報告では、保育者養成や現職者への研修において、評価尺度を用いた評価の指導を行う際の基礎資料とするため、保育者養成校の授業での学生の保育評価尺度に対する理解などを質問紙などで調査した結果を報告する。

2. 方法

(1) 調査方法

2021年1月にA大学の幼稚園教諭・保育士養成課程に在籍する2年次生37名を対象として、授業の中でECERS-3など評価尺度を用いた評価の演習を行い、その後質問紙への回答を求めた。

質問紙の項目は、10の姿や評価尺度による評価を自分自身が卒業後保育現場で使用できると思うかや評価尺度による保育評価のデメリット(短所)だと感じる点などについて尋ねた。

調査は無記名として、調査対象者に対して調査趣旨、結果データの使用範囲等の説明を行い、調査への協力について書面による同意を得た。対象者の内、質問紙の提出がなかった2名、書面による研究協力の同意が得られなかった1名を除いた、自身の回答などを研究に用いることを許可して書面による同意を示した者34名(協力率91.8%)を分析の対象とした。

統計分析においては、群間の比較の際はマンホイットニーのU検定を用いた。

(2) 授業の内容について

授業は、ECERSやSICSなどいくつかの保育評価尺度について説明したうえで、ECERS-3の評価方法などについて説明を行い、6つの下位項目について、自身が教育・保育実習を行った園の環境を思い出しながら評価を行い、評価結果に基づきグループで実習園の長所を考えていくという内容であった。

3. 結果

(1) 演習の感想

学生の感想では、まず「保育に対するの評価尺度があることを初めて知りました。」「評価することは難しいと思っていたけど、こうした表があることを初めて知りました。」「チェックリストを使って保育の質を見ていくことができると初めて知ることができ、学びが深まりました。」「点数つけという評価方法を用いて間接的に園を評価することで自分の感覚だけでは分からないもっと改善すべきことやよりよくできるところが明確に分かるようになることを知りました。」など、評価尺度を用いた保育評価について初めて知ったという意見が多かった。

また、評価尺度に対するネガティブイメージについて述べた意見としては、「点数化することが良いとは思いませんが、それをきっかけに保育環境を改めて考えることができる材料にもなると思いました。」「園にはその園の良さがあり、比べるものではないかなと思いました。」「説明をよく聞かないと評価するのは難しいと感じました。」など、点数化や比較することの是非、評価の難しさなどが挙げられた。

その他、「環境構成の全てに色んな意図があるんだなと感じました。」「実習中には意識してなかった所を評価するという形で見ることによってどんな園だったのか改めて感じることができました。」「自分の実習の園を改めて評価点で見るとどのような幼稚園か理解できた。」など、新たな視点が得られたというものや「今回は絵本に親しむ環境を実習園を通して評価しましたが、良いところ、悪いところが明確にわかったので、実際に保育者になったときに使ってみたいです。」「子どもに遊びを提供したり、環境整備

する上でチェックすべき項目を整理して分析することで、その環境等に必要な要素が欠けている所を見つけたりできるため、これからの保育する上でも活用していきたいと思いました。」「評価する事によって子供たちがより過ごしやすく、学びやすい環境を造りあげることができ、見直す為にはとても効果のあるチェックシートだと思いました。」など自身も就職後に評価に使用してみたいというものなどがあつた。

授業全体を振り返っての意見としては、「評定尺度は、点が高かった低かったということで終わるのではなく、なぜこのような項目が評価対象なのか、なぜ〇点と評価したのかなどの点を考えることが大切ということも学び、是非将来に活かしたいと思いました。」「始めはこんなふうに点数化しても意味がないのではないかと思いますでしたが、どの項目で満たしているのか確認できて、何から手をつけたいのか分からないという問題が解決すると感じました。」などの意見があつた。

くわえて、評価から理解した実習園（クラス）の長所や課題では、「今回のスコアで気になった点は、個別的な指導と学び、保育者と子どものやりとりの2つです。まず、個別的な指導と学びでは、自由遊びの際、保育者から子どものところに行き声掛けしている様子が少なく感じました。」「評価した項目のほとんどが高評価で子どもが主体となる保育がなされていると感じました。子どもの成長に必要な粗大運動の見守りや個別的な指導がいき届いている点は長所であると思います。」などの意見があつた。

(2) 質問紙の結果

「あなたは、保育現場で幼児期の終わりまで育てほしい姿（10の姿）を自分自身が評価に使うことができますか?」「あなたは、保育現場でECERS-3などの評価尺度を自分自身が評価に使うことができますか?」という設問の結果を表1に示した。

10の姿による評価は、41%が評価に使うことができる（十分に使うことができる、やや使うことができる）と回答しており、評価尺度による評価は47%が使うことができるという回答で

あった。

表1 評価を使用できるかについて

	10の姿	評価尺度
十分に使うことができる	3%	6%
やや使うことができる	38%	41%
どちらともいえない	47%	41%
やや使うことができない	9%	12%
全く使うことができない	3%	

また、「あなたは、保育現場で幼児期の終わりまで育てほしい姿（10の姿）を自分自身が評価に使ってみたいと思いますか」、「あなたは、保育現場でECERS-3などの評価尺度を自分自身が評価に使ってみたいと思いますか」という設問の結果を表2に示した。

10の姿による評価は、74%が使いたい（とても使いたい、やや使いたい）と回答しており、評価尺度による評価は53%が使いたいという回答であった。10の姿と評価尺度についての回答を比較したところ、差に有意な傾向（ $p=0.065$ ）がみられた。

表2 評価を使用したいかについて

	10の姿	評価尺度
とても使いたい	15%	6%
やや使いたい	59%	47%
どちらともいえない	24%	44%
やや使いたくない	3%	3%

評価尺度による評価のデメリット（短所）に関する質問では、「評価してさらにそれを得点化しなければならないので時間がかかる」、「評価するのと同時に、計算しなければならないので時間がかかる」、「項目が多くて一つ一つ振り返るのは難しい」、「理解していないと評価がつけ

にくい」、「数値を知って他の園と比べてしまう」、「それにとらわれておもしろみにかける」、「項目にないことは評価できない」など手間や時間の負担、点数化することなどのデメリットなど挙げられていた。その他、「評価する人で評価が変わる可能性がある」、「園の考え方や運営形態によってできること、できないことがあるので評価が難しい場合がある」、「評価の基準だけで判断しがちになるので、新たな発見や改善点を見落としてしまう可能性がある。」など10の姿など他の評価方法にも共通すると考えられる回答もあった。

4. 考察

(1) 結果について

まず、卒業直前の学生であっても、ECERSなどの評価尺度については、「初めて知った」といった回答が多くあり、学生は保育に関連する評価尺度についての知識が十分でないといえる。また、数値化することやそれにより比較が可能になることに拒否感を持った回答もみられた。

これらの点に関する保育者養成教育の課題としては、評価尺度による評価について授業で触れていくことや演習により実際に評価を体験してみることがまず重要であると考えられる。文部科学省が示す「保育内容の指導法」の教職コアカリキュラムにおいても、「幼稚園教育における評価の考え方を理解している」などの項目が挙げられているが、この際に実際に授業扱われるのは前述した、記録や語りによる評価が中心になっており、評価尺度を用いた評価に関する学びが十分でない。学生の意見のように、数値化や比較の限界を十分に認識することは必要だが、くわえて数値化の長所を理解することや観察記録などを基にした評価にも限界があり、目的に応じて評価を使い分ける必要があることも学生に伝えていく必要があると考えられた。さらに、「評価が複雑で難しい」、「時間がかかる」という意見もあったが、その背景には、どのような方法であっても評価は総じて難しさがあり時間を要するもので、10の姿による評価にも一定の期間が必要で評価尺度と同様に複雑さや難しさがあるということが学生に十分に伝わって

いない、または、評価尺度に対する学習時間が短く理解が深まらなかったなどが考えられる。

また、評価の演習により、新たな視点が得られたというような回答も多く、評価尺度の項目を丁寧に見ていくことが、保育に関する視点を豊かにすることにもつながっていた。これは、山下（2018）¹⁷⁾ や杉村（2019,2020）^{18,19)} らが報告しているように、評価尺度の項目は、学生にとって保育の質を考える際の手掛かりにもなるものだと考えられる。

質問紙の結果については、10の姿による評価より、評価尺度による評価は、現場で使用してみたいという学生の回答が少なく、ここまで挙げた学習の不足による不十分な認識から使用したいという学生が少なくなってしまうと考えられる。また、教育実習・保育所実習などの際にも、10の姿などによる評価と比較すると評価尺度による評価などを目にする機会がないことも影響を与えていると考えられる。

くわえて、評価尺度による評価の比較対象とした10の姿を用いた評価について、保育現場で使用できると思うと回答した学生は約4割で全体の半数に満たず、評価尺度による評価に限らず、評価を行うということに関する知識や技術の養成により力を入れていく必要があると考えられた。また、評価方法には、完全な方法はなく、様々な方法を組み合わせることが求められており、評価尺度を用いた評価はその一つとして重要な位置にあるものだという理解を学生が深めていく必要もあると考えられる。

（2）現職者研修への示唆

学生の卒業時点での印象や知識は、現職の保育者にも当てはまる部分が多いと考えられる。数値化して評価することへの拒否感や評価尺度のよる評価の煩雑なイメージは学生と同様に認識していると考えられるため、これらについて十分に説明する必要がある。また、現職者にとっても、保育の質に関する研修を行う際に視点の参考として活用できると考えられる。

（3）まとめと今後の課題

養成段階においては指導案の作成や保育内容・

方法の学習、保育現場においても保育計画の作成や保育内容・方法について目が行きがちになり、評価の優先度が低くなっていることが多い。しかし、保育の質向上には適切な評価は欠かすことができず、特に評価尺度を用いた評価について養成段階でさらに学習を充実させる必要があることが示唆された。

今後は、現職者に対する研修実施の参考とするために、現職者の評価や評価尺度に対する認識や理解についての調査を行っていききたい。また、10の姿などの記録や語りによる評価と、評価尺度による評価を組み合わせることで、保育改善に効果を上げている実践事例の収集にも取り組んでいきたい。

5. 引用参考文献

- 1) 文部科学省、幼稚園教育要領、2017
- 2) 文部科学省、幼児理解に基づいた評価、2019、チャイルド本社
- 3) 高辻千恵、保育学講座③保育のいとなみ 日本保育学会編 第14章計画に基づく省察と評価、2016、東京大学出版会、317-318p
- 4) テルマ・ハームス、リチャード・M・クリフォード、デビィ・クレア著、埋橋玲子訳、新・保育環境評価スケール①、2016、法律文化社
- 5) 埋橋玲子、諸外国の評価スケールは日本にどのように生かされるか、2018、保育学研究 56巻1号 68-78p
- 6) 菅原航平、絵本に関する保育環境の課題～様々な子どもの発達を促すための絵本活用した保育～、2020、初等教育—研究と実践— 44号 77-89p
- 7) テルマ・ハームス、デビィ・クレア、リチャード・M・クリフォード、ノリーン・イエゼジャン（著）埋橋玲子（訳）、新・保育環境評価スケール②、2018、法律文化社
- 8) キャシー・シルバー、イラム・シラージ・ブレンダ・タガート（著）平林祥・埋橋玲子（訳）新・保育環境評価スケール③、2018、法律文化社
- 9) イラム・シラージ、デニス・キングストーン、エドワード・メルウィッシュ（著）、秋田喜代美・淀川裕美（訳）、「保育のプロセスの質」評価

- スケール、2016、明石書店
- 10) キャロル・アーチャー、イラム・シラージ(著)、秋田喜代美、淀川裕美、辻谷真知子、宮本雄太(訳)、「体を動かす遊びのための環境の質」評価スケール、2018、明石書店
 - 11) フェール・ラバース(著)、「保育プロセスの質」研究プロジェクト(訳)、「子どもの経験から振り返る保育プロセス、2010、幼児教育映像制作委員会
 - 12) 名古屋市立第一幼稚園、幼児期の豊かな言葉の育む指導と評価の在り方 平成28年度研究成果報告書、国立教育政策研究所
 - 13) 熊本大学教育学部附属幼稚園、学びをつなぐ教育課程～幼児期にふさわしい評価の在り方を探る～ 平成30年度研究成果報告書、国立教育政策研究所
 - 14) 幼児教育研究センター、9. 幼児教育研究センター 研究・事業活動、令和元年度 国立教育政策研究所年報(第30号) 58p
 - 15) 秋田喜代美、石田佳織、辻谷真知子、宮田まり子、宮本雄太、園庭を豊かな育ちの場に: 実践につながる質の向上のヒントと事例、2019、ひかりのくに
 - 16) 埋橋玲子、岡部祐輝、保育環境評価スケール(ECERS)の保育現場への導入 評価を改善に結びつける、実践知の言語化のツールとして、2019、現代社会フォーラム No. 15 49-61p
 - 17) 山下京子、保育の質と保育者養成に関する研究、2018、広島女学院大学幼児教育心理学科研究紀要第4号 9-21p
 - 18) 杉村智子、保育者志望学生における保育の質の認識-遊び場面での言語的・非言語的関わりの評価を通じて-、2019、帝塚山大学現代生活学部紀要第15号 51-59p
 - 19) 杉村智子、保育者志望学生における保育の質の認識(2)-遊び場面での言語的・非言語的関わりの内容分析-、2020、帝塚山大学子育て支援センター紀要1号 19-28p